



繪本拾遺信長記

後篇
三

特別
13
2507
16



門 遠
號 2507
卷 23-16

繪本拾遺信長記後篇卷之三

目録

松永彈正謀叛之事

信長村舟に命じて松永が人質と殺せし

細川五七郎兄弟先陣

羽柴秀吉が松永が急使と捕ふ

松永久秀の滅亡之事

秀吉が軍兵石山舞臺にて信長の城中に入



信美山落城

松永貞徳の先祖

信長雷和寺願寺事

信長石山夷評議

申お信忠御旗州後白

本願寺評定

荒本夫那西志石山城より

繪本拾遺信長記後篇卷之三

松永彈正謀叛事

小田内大臣信長云、紀州の一揆を平け勢州の礼と静め軍の
乃いとま暇くりむかくて天正五年と秋八月の上旬はなり
小々のけ附撰津石山へ御陣と向らるるきの如く石山表天王
寺の赤ま在陣せし松永彈正久秀叛送乃企てありて天正
五年と引拂ひ己が居城大和の信美の城へ揃舞り専合戦
の用意とぬけは信長表を番の諸大おより信長云
浪進中々れが信長云、石松永が叛心我先より能知あり
と人とも老功の武者と能と惜んご助け是より征せ
どんが叶はじとく先松井宮内御法印とて信美の城を



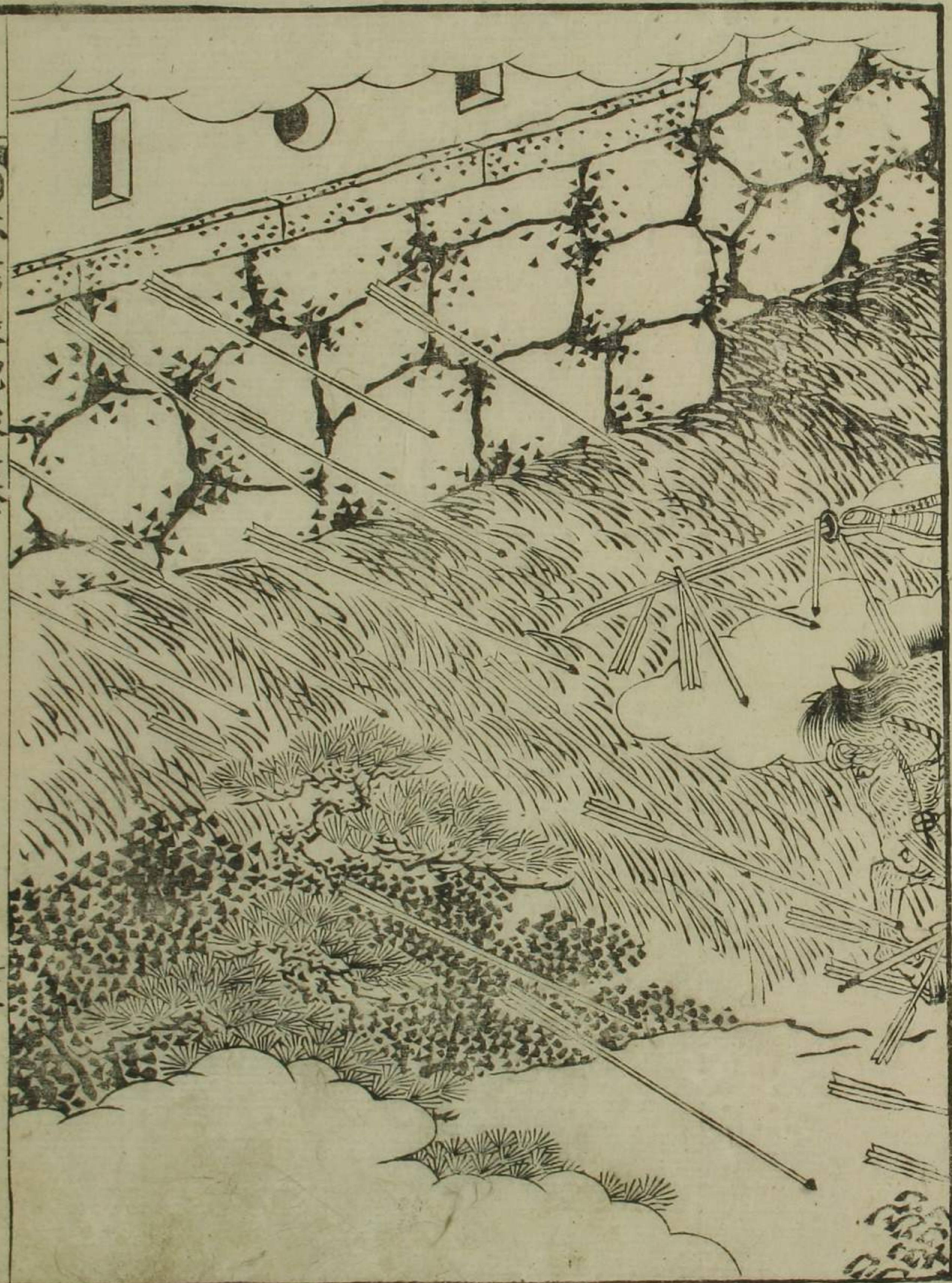


信長のぶなが
 村舟むらふね命のみこと
 て
 松永まつながが
 ひとぢぢ
 人笑ひとわらと
 殺ころし
 終はつふ



巷いざれ竹中の子細ありて勢城の格捕ま及びひやな中
 とぞ見者御怒あり多きば松永一向逆心の多と罷河後
 を城中へ入込退りしうらぐれ信長甚怒り終ひ松永
 が人質を指し出さるる時二人京都と引也し兼本々律し
 謀叛人の見せしめせよやく河目代久部若七郎後
 平左衛門西人な佐渡されたるときば松永が男子十一と十三と
 ありたる多き久向五六郎が籠り出さるるに列出村歩
 長門守が署をいせしよえしつぬ英事と梅花乃霜
 と痛むらうさまと見とそ海と流し罪を犯す子の
 父が謀叛より失せしむの不便をいれあく安と志のひか
 内裏より入りしうらぐれの方より命乞とばし終り若や助

ろりもみずしとくくと進められどけ男子多路へ登れり月
 らく又謀叛の企いとの我くが配せんゆえより是悟のりよ
 いへ確言命と教るとも父の家滅亡し若の御怒と受ま面
 目のいて世の人と面と對しやべきましく首と切らさし
 若の御怒りを休めたるは父が罪科も腫くはまん
 神となく空へくれ長門守大さ小感と落涙教り及び
 たるが父の方へ是初乃書とも書めよし送り届け得る
 ばしと現筆をいれあふれど父謀叛と企いとの我くが死刑
 の覚悟のりよはは別と中送らんゆいは唯多久向
 五六郎及日以懇請の女抱を難く志さかしてて久久向
 が方へ一通の礼状と書し其翌日兄弟二人いと川車よ家

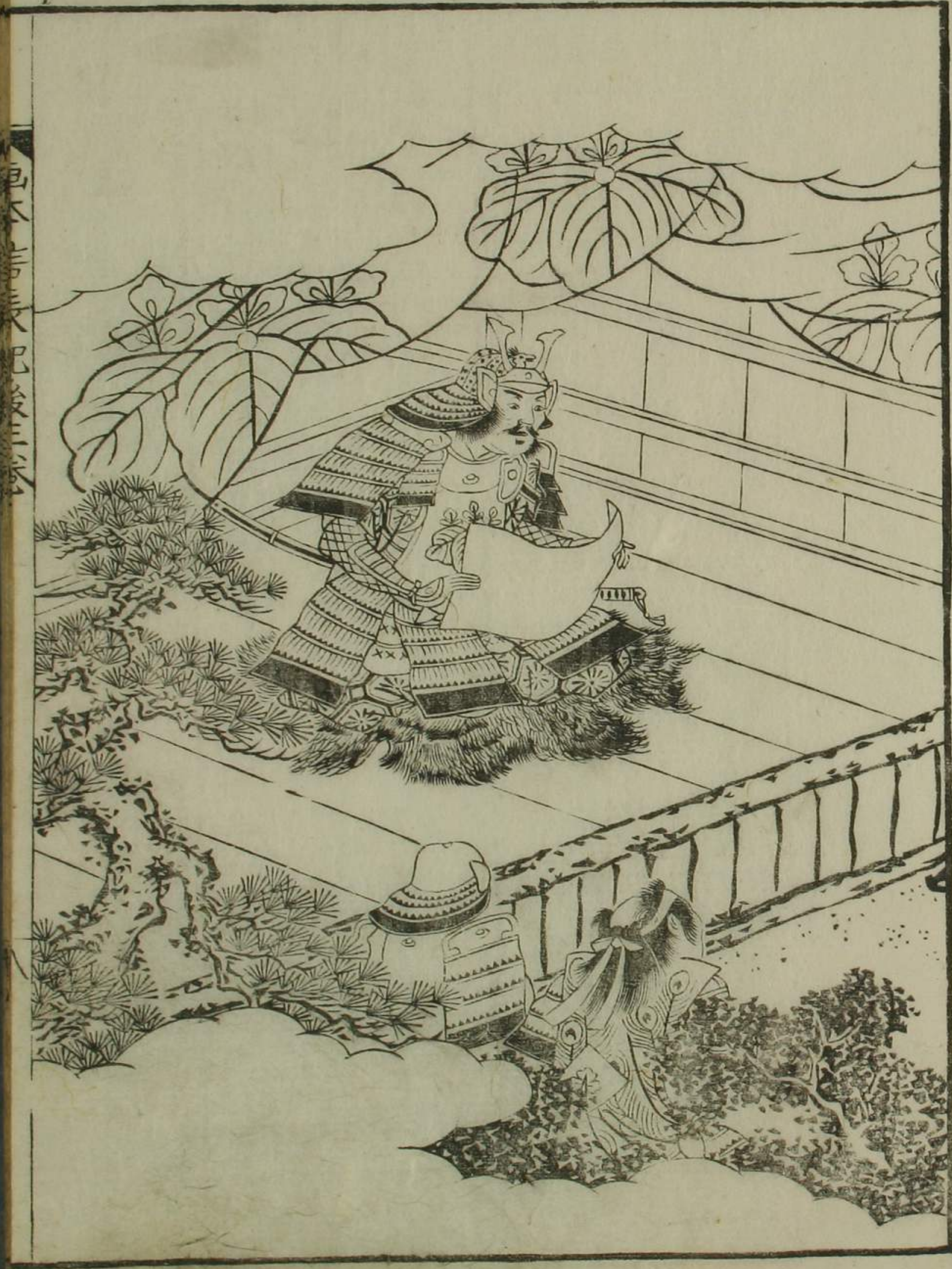


と鳴りし川もつとく妻入る小城中の兵も義と鉄石のぶ
 とく固り命の塵埃よりも輝くは「只れ引込おれ」を
 防ぎまゐるといふも多勢のよせむ荒子と入替美満といは
 り防ぎ守るべき力なきとてお森海老名も本丸へうけ入て
 十文まよ撥切て却りたる不義兵をひくは討死し其日の
 甲討既と燃い為りたり信忠御軍率の号と稱し度々両
 日は足あり石山と森の内より羽柴統元守秀を去る間
 右衛門尉信盛輝谷兵庫次郎隆を召せらる軍勢と併せ
 日月三日信美の燃え押寄山下の民屋と焼拂ひ至夜のと
 ういもたつ喚き叫んを妻たりたる松永元来世は城より老
 婦の武士をいれが流るぐは下知と加へ大木を扱け大石と焼

かけきびしく防ぎ戦へいある大軍とともども敢て澄深く
 考り結りぬれ傷の者ありたりは妻あぐんでぞ月々なる羽
 柴統元守秀あり山の林麓小の方溪と隔て陣と置し八日の
 夜守り曲者一人と揃えたりある者被者の懐中と探しむ
 る小松永が石山中へ加勢と乞書状なり其文曰く
 希得まれ甘心無限候野生雖も不肖能撰我
 國之中頗英傑之知振舞大志永不可居他人
 之下位忽發大志信長及合戦候早雖而必
 勢不能破大勢希以中殿寺沖加勢龍長信長後
 相狭討之保平國款佛款耳

天正五年十月八日

松永彈正少弼久秀の



画本
長門
松平



孫紫衣の吉
松永の
密使
捕ふ

画本
長門
松平

本教寺軍師

鈴木源右衛門尉殿

舟の右を走と見とく大さ小教び被毘びの者を陣中よまびしく
捕らふ大信忠卿の御志に依り謀略の次第とも委しく言と
然て陣中へ入り朝建孫平尾尾帯刀又計策と中合み其秘密
又陣中と仰け城と系落とんり西三日の向ありと晴又笑を
合と云ふ

松永久秀の賦云

松久は十月九日に方乃秀多一日又櫛と御竹策と並(周)と他
て美上る例又遠り於城中よりも矢玉と櫛まびさんぐみ
防ぎ我小程又今日も秀多に死傷の者抄びけしく少(少)攻は

と退き矢軍のそよ時と後しぬ其日の番方西山の方より又十
騎引軍兵南五石可思後先如来の白旗押立羽世本秀吉
が陣中と云ふ又斬開きつと押通ひく城門進く進く来
る松永是と見とく本教寺の援兵早く城の中へ迎へ入ると
城戸を開ひく入りたる羽柴惟任が両勢さいせじと進来るが
早く城門を閉矢倉くより弓鉄炮と打出ひの雨のどく
秀多進とて退きぬ時又本教寺の軍お松永が秀多に渡
て歸き其い本教寺の門後橋右門と申若くそは軍陣重
舉目来秀吉の武功を志し本教寺よ松きしせるが我賦を
松永は又謙し幕下の二おと仰りて功と勳びき小教多と仰
て鋒先と秀多んりこそ申言にあははとやと歎息してあり



信長公記

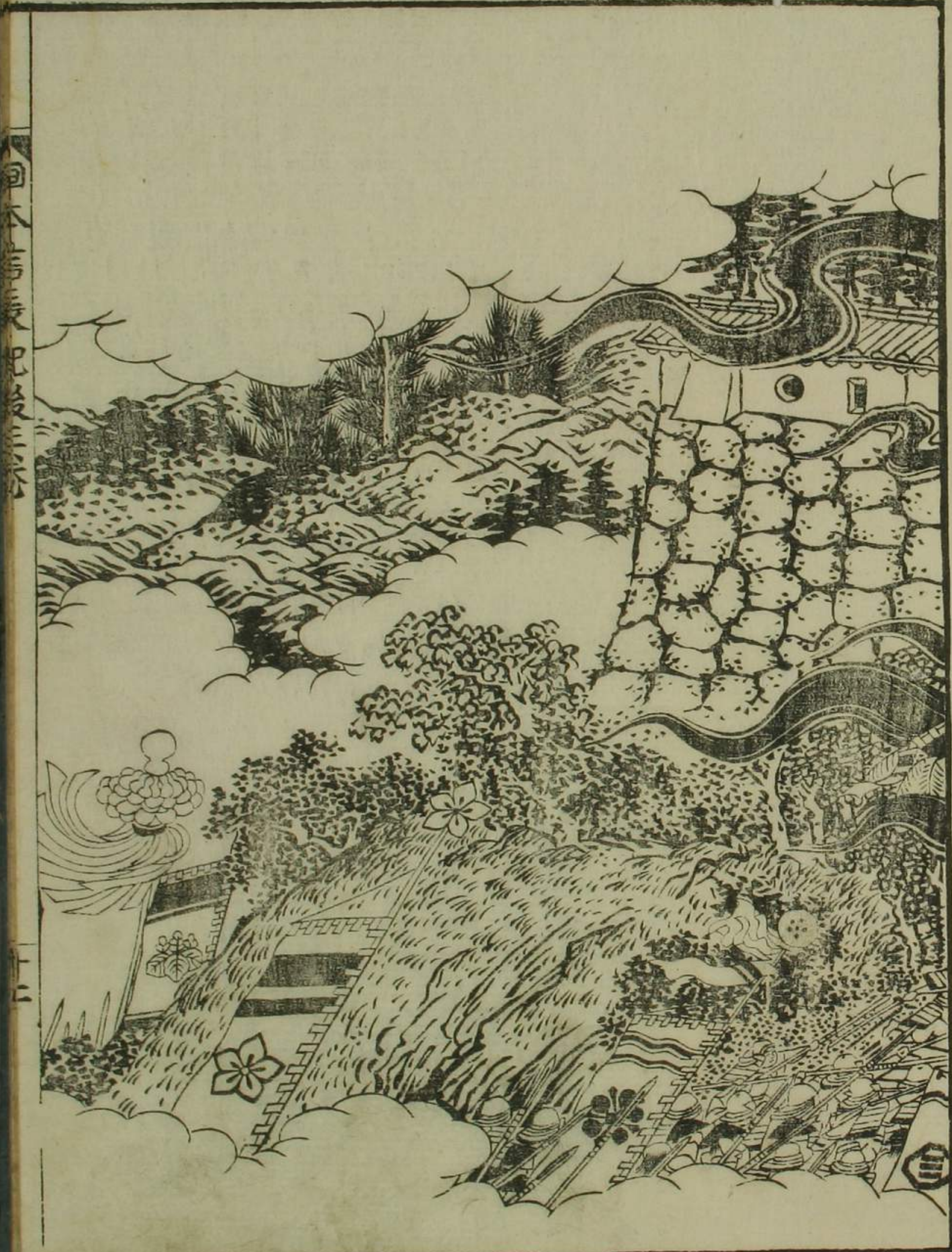


いよいよ
秀吉が軍兵
石山城へ
信長乃
城中へ入
仍る

石山城

石に今度信長と歎のまに成りし終ひ当城に備給防然も
 ぞれ結構と空しくより加勢中へきふ石の城も今守護たる
 の附節うろをみて心外又恐止ひこそは惜くは此日の書状見付
 立敵は右門をみて我いと受けし明日書方よりは重幸自ら
 大軍と率し信忠が一軍と勢のぞくはして日比の勢懐と懐
 ひまへ間其附城内よりと揺合せく力幾あぶき命重幸中道
 比と平伏して述べうろろ松永久秀先と受て大まふろこび
 重幸當城の後治はし終ふとろろ信長信忠と討てさんこと
 何の子細ういりいので明日の夜にき合然を返して歎兵ども
 あい吹せやべととて酒宴と返けたまぐと郷食應し夕夜
 秀の者ぞ計略とて朝押極尾の西人難兵の中は折難本報

寺の援兵と歎き城内へ入りしめろる松にしと野斗源き松永
 と寔の本報寺勢と心と救し城中よりめろく重幸が援
 と待ろることと歎き又武運の盡る時とと沙後より次所之
 御まは十月十日朝勢沸く咫尺の程も見へまろるが
 りたろろと責せは已越るる時をより諸方の旗のゆろめ
 き出し周と仰りし金鼓と鳴りしめろるきつとぞ攻りろる
 其日とよろや勢とてくむる雲立度いする勝月夜と秀は
 と退け備とりのやし松明とつと孫影と入替責ろるよと城
 中より又珍本が援兵とる附分と矢合くととととととを
 の陣中と目と殺さる見居るるに忽羽柴惟任侍母
 陣と終くと死と二の勢縦横と弛遠ひ歎と斬崩とるの只



日本書紀後三卷



信美山
落城

日本書紀後三卷

虎の軍と追よまらるる松永遙より見ると是必は重幸が勢
 ろうんけ方より討て出揃合せてお崩せよと嬌る久道
 又三子余の還幸と授け燃戸用ひて討せりあるの諸
 軍先と見ると八方より五圍と鎗ふとまを燃戸と實立に
 燃兵討る若敷と考へて鈴本が勢の竹組よりあつてと
 目と配つて見巡ると是と石と勢と思しき兵と見へて
 附の燃中へ入る朝井燃尾の者人又十余人の勢も
 中絶し矣倉小屋く一日又火と放てば燃火の八方に配
 了黒烟中より濃らぬしきつゝ見え方は其火のやより
 周と燃門と斬也れ燃中の鼎の涌てく噴き時ふ多
 かり八面よりあるの大軍一日又炎より燃戸と破つて

込へおふ松永彈正今叶ふがたの換りしと天守は
 よう中より火と放り自害して配しつゝある松永は
 智あきとも焚く謀と考へても又曲りてれが邪謀と
 て一たび天下の概推しりも忽信貴らとの烟ときて
 家名永く断滅せしも積悪を逆の志しりもあつて
 然中まらる永福年間三奴が軍國我の附南都大佛殿と
 焼立派義の勝利と得りし十月十日の夜よりけり
 今月今日月日も日ごと十月十日猛火の中と配しつゝ
 して靈佛聖場と焼出るとし佛も法も願も自業自
 得の感とるをあらはしと悲とる者ありし是とて又私
 按は當時信長と威と海内と振ひ橙と州郡と布て内



西本傳長壽御三卷

去居の右大ぬは昇進一天下と三分あり其ニツと保ち専ら
 仁惠と氏と遊し「國家の平安とこそ頼む給ふをたゞ唯二合
 哉とこの人々と教とるやと頼む給ひく聖徳をまの仰命の
 靈地より石山本願寺と滅せせしやんと教奉の回軍馬と勤
 し如素の靈場より向ひ殊絶をお借借教一合哉ひは此に然と
 懐る者若信万との教と知るべし松永が六佛殿を焼く
 是より於佛罰の深重なるべし御心の終りこそ危ううは
 と心ある者は皆眉をひそめてさやきたるけし時松永が嫡子右
 衛門佐久道の落城ありありと見え父が美知の際にも
 一方と切破り後とも見れば一て落城しが中國(志)のびり
 長門國は深きくけりしが其縁に永種といふ者あり永種が子

と松永貞徳と号し世よ名も兒に誂人あり

信長需和申願寺事

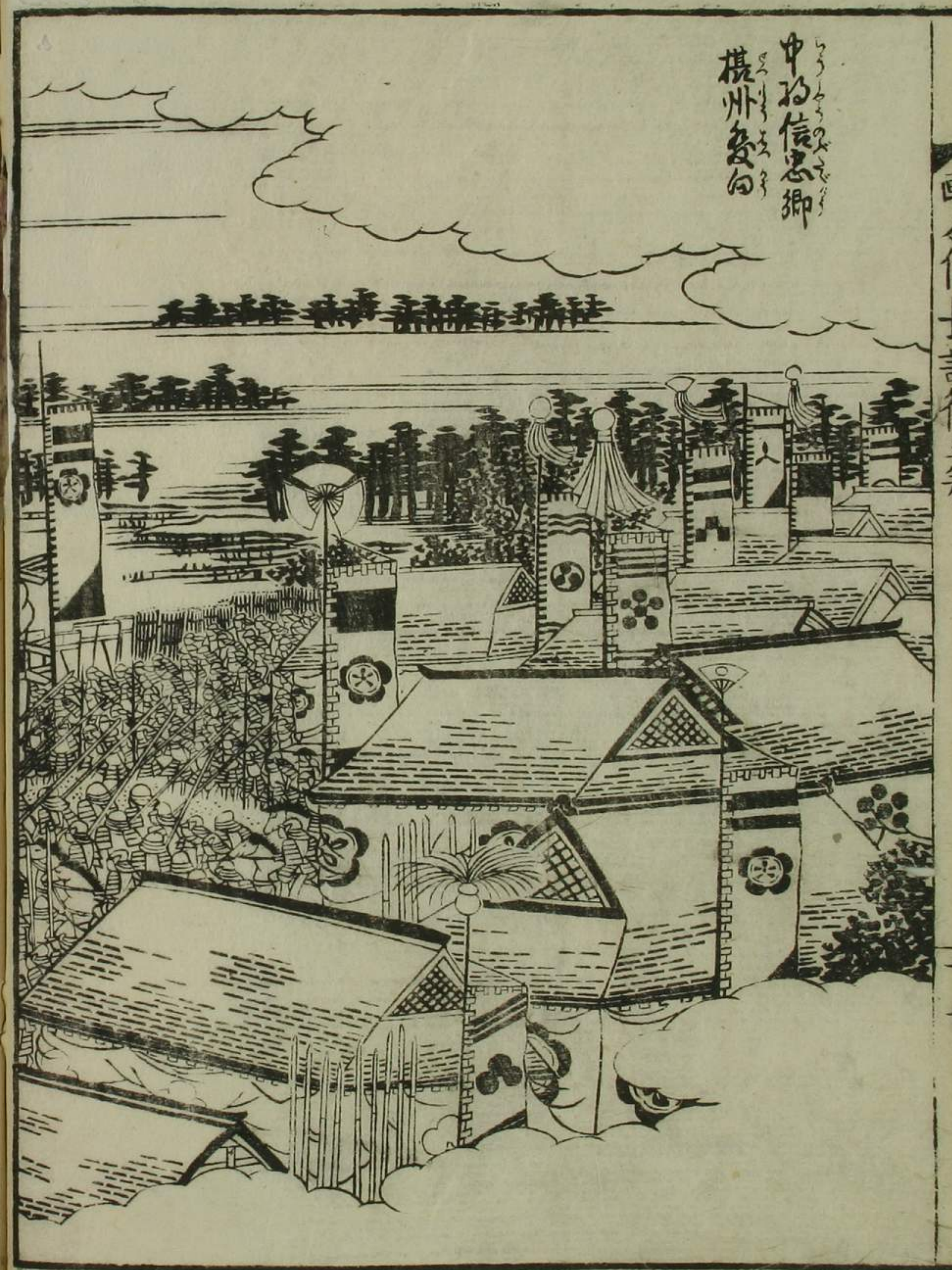
日月十三日城之助信忠御軍馬とまどろと洛し給へば禁庭
 にも今度凶徒多容易退治せしむる糸津めの旨敬感あり
 三位申おはせ給ひ信忠御恩と謝し十七日都と立て去
 乃城へ降陣ありたる去程は信長公諸國の然歎向ふよこび
 ざる若りゆく征とれは忽降り勢ひまどろく登んがれは
 只石山本願寺のま又伏しとる氣をりゆく緒を煮たせし
 度毎又味方放軍して傷死乃若少るうけいふ世して石
 山を責授んとさましく思ふとめざりし給ふは藤州の毛利
 家より石山へ兵糧と介こそ奇怪なり先中國とゆえん後



信長のんちがこう
石山いしやま美み
評議ひょうぎ

石山と丸圍兵糧と減して責を以てせしと抄下し石山羽柴統
 秀守平の吉又攝磨一團と揚子毛利退治の先をうづるべき
 旨命じ給へる秀吉藩で恩と謝し十月廿三日安芸とまで
 播州へ進發せり其年もとせしるる善く明き天正
 六年春二月内府信長之重て石山を責らるべき事評定
 し給へる播磨中お信忠郷今度の討ち給へるを給へる信
 長之則是と免し給へる信忠郷とて惣大おとほし相とて
 人々又は金分小田信雄郷三男神部信孝郷小田野成
 信包津田源三郎勝長惟信又即左衛門尉澁川光道お監
 降登兵庫次明智日守守等軍おとして尾州澁州は
 州若州其外畿内乃軍兵と修し集り其勢都合二万余人

石山乃四面八隅と鉄桶のてく丸圍と舟樓と組とげせ云々
 と築楠竹箒と櫓とて嚙き味で責より多の抄ひはし
 きあさよ之城中より日夫余く塙の狭間と大竹石火矢
 火箭妨槍弓槍長柄とひしつくと並ひ立責よる敵と討崩
 し塙際近く秀吉来る者と長柄とて突進し秀吉謀計を
 及げ是と責よは城中の櫓と智て防ぎ幾人殺し互方死
 人も負殺ととるはつと人も塙際とんき押交はしつ果
 ぞ死とも見ぬ戦ひ信忠郷とはしり秀吉の人も中へ
 らんろつは塙要害堅固して中へ急には責よし給へ
 尚耐羽柴統秀守中國征伐として播州へ下向しつは後
 毛利家其外西海の大各より兵糧を入りつみえつはと



中納言信忠御
横州参向

信長言集三卷

に上方の附城と増築さし八方より芝出と勢よく構へ諸方の
往來と密に禁じしは城中には六方より余り門後三月斗
の内より兵糧盡く盡きて居城と成り力盡くるといふ
づに軍兵と費はのりてしむるやうの功なきは其
城中には給本重幸より軍法に通じ居城の門徒等
多量のぞと強引し味方の兵を奪ふさまに勇んで急攻
んりていもあつたは皆一日より中々れ信忠御も實りやと
とささく先着はと三丁より退き長蛇のぞと陣とつ
孫治の次第を安去の城へ退進あり去程に内府信長云
諸國の征伐事勢あり安去の居城はしつとも安去と保
孫と向ふ國へ令と下し進て國政の執行に困難

ぞ久しき時より揚州表より信忠御の御使來として石山合戦
のありさまと言し城中強く急に居城の御守はし退進と
せば信長もいし石山の表接難き不始とつぐと終つて
と雖も孫より當附山陰山陽西國に國及び東國の山系氏政
勢強くと諸國いまだ靜謐なりは然るも佛法師と歌
殺軍軍馬と費し御幸と安去より良政のおんけひは
は今方便と成て一度中御守と和睦を乞はれし渠が勢い
力強しき時と見合せ奉り討ては物なりは是等も
と終るより安去の心の内は謀計と構へ荒本松澤守
矢部若七郎兩人と上使とし口より強き安去と終
らば石山城へ進し孫より兩人知らし居城の根津より



平賀寺
評定

信忠郷の本陣より内府云の恩石とヤと石山の城中へ
 安去よりと後系との中と達し兵杖を留てお忍へ終るを
 き布ヤ入よりたりと人死て諸門下と集めけりを評議
 終ふに鈴木重幸大さ小島入と信長由城と長徳と
 悔り狼より軍馬ととめ責崩さんと斗きとも城中の
 門徒多き実実の忠義ととひ務請して防ぎ交るる信長
 終に大さ御斗盡今仍りと構へと人を欺んととるるる
 一先石入と其口よと成せ終る危うて是和勝と計んとの
 後若るるる何よもいと即尅の返言と河遠よりて衆
 のと受し終るとヤとれいと人毛よ日と終ひ死て信長の
 両俊と城中へととめされたる荒本矢部の人正しく礼

服と受し後若終よ十人斗よと城中へ入来りよと人の面福
 て主人信長と人へ中城より脱き小田と本教寺の妻家年
 権よ及び多事乃合我勝負を争ふと互よ何の脱えと
 つるを知らぬ原素両家にお眼よびきりるては去ル年
 信長三奴征伐乃る攝州後將よ在陣せし時本教寺謀
 計とて信長と没し狼より又御戦とつ門と教罰と初る
 安とてははじめ小田と本教寺國章の基と成せり信世
 の飛勢と考る小生とと成び死と悲しむい情ある者の天性
 然ると脱えりなき事然よ多くの人馬と傷いひまらる
 軍卒と若めんり毫よ不仁の甚き不業よ何れや私よ
 とよ信長の武家に生れ征伐と初るてよい至とと保



荒木矢部
 両士石山
 到る



いなり下万民の古炭を飯ひ衆と後世も得るも厭ひ
らし只奉教寺上人に旅るや何ぞ俗人といふく我場
修羅の國津と好む終るや信長佛の意といまご知れ
とくも怒らるゝ如來の祈言願ふ遠い終るるを是必
道長又の門後の輩と人を誘ひ乱とるまんと企るもの
かりんし安とんて双方年来の恨も忘る永く和睦とを結
西家水魚の交とるまんと人許容し終るるゝは出産の
引出物として永く八本又万石と進し和泉河内西國の内は於
て二三郷の地と永く寄附とんき同屋との地へ本寺建立
みく出石山と用き終るゝは押ひるゝ朝廷への忠義万民の歎
何のりが是又如くこれみん切て後者とんて微意と告るる

かくのじと謹で演まらると人足を聞せ終るゝは信長の
街存殊勝の御事又覚え我僧の身としくゝいそ我
を好む天下の乳と歎んや元より郡國と年々軍も水と
只當宗旨の承く勸減せんを思ひ止り終るゝは防我
よ及ぶのまわり後者の面く將尉客殿と立く和へり門
下の石僧と相議とるし終て返言やとと終るゝは荒本
矢部の友人御衣といと客殿と退き体足してあけは
山海の滋味とつゝ終郷食意やとと町寧かり

繪本拾遺信長記後篇卷之三終

西下言長已後三終

七三

臨本竹書詩經三卷

十三

